

はひりのやふに鶯のなく

その折々

村山元子

重き荷をあへき引くこそあはれなれ

うしとは誰か名つけ初けむ
いもうと、共に遊ひし古里の

野邊は昔にかはらさりけり
母君のたちぬいまし、我袖を

露のやとりとなさじとを思ふ
玉川の流の末を酌む人の

心も玉にすすよしもかな
ぬふ針もいつしかやめて幼子の

眠れる貌をまもりぬる哉

遣羽子に上手盡すや姉妹

書初や太郎冠者のたのもしき

年禮の繪端書多き机哉

長幼序ありみつ置たる屠蘇の盃

愛 櫻 涼 月 船 村 二 樓

御手植の松の梢や初旭影
追羽子の行衛や庭の寒紅梅
萬歳や家毎梅咲く村に入る
蓬萊の米こぼれたる疊か那
元朝や左右に開く金襴
本箱に元旦の詩を題すか那
三尺の庭の初日や谷の菴
遣羽子の群に入りけり屠蘇の醉
庭に積む雪見ながらの年酒哉
万歳や戸口に烏帽子落んじす
子女多き家庭の春や羽根手鞠
居催促初雞聞てかへりけり
猿引の頭巾冠りし小猿か那
初日の出參賀の馬車の轡きけり
遣羽子や洛陽の公子兵に堪えず
落したる羽子雞の啄みけり
羽子それてあれと云はんも垣隣
庭先や羽子つく夫人身重なる

杏子 鷓鴣 芝水 鬼水 郊外 移雪 武骨 笛水 直哉 石文 菰堂 木公 松軒 龍鼓 夜月 圓係 春子 聽瀟